Empowered by Innovation NEC

日本のCO2総排出量を国民1人あたりに換算すると年間約9トン。
1日あたり約25kg（ほぼ写真のサイズ）の排出量になります。

私たちはCO2で考えます。

IT、で、エコ

NECは、ITソリューションをCO2排出量に換算して評価しています。

www.it-eco.net

TOKYO GARIOA FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATION
ガリオア・フルブライト東京同窓会

NEWSLETTER

No.16
December 2003

©共同通信社

総会でのスナップ

歓迎会でのスナップ

国会議事堂・最高裁判所見学

2002年ノーベル物理学賞受賞
小柴昌俊 東京大学名誉教授
講演趣旨

この講演は2003年5月26日(月)、国際文化会館講堂で総会に続いて行われました。

小柴昌俊　東京大学名誉教授

「素粒子と宇宙」

題は「素粒子と宇宙」という題なのですが、この中の大部分のお方は、「素粒子なんて、宇宙なんて、わたしは何の関係もないよ」とおっしゃるだろうと思うのです。でも、そうでもないので、われわれはみんな宇宙の中に暮らしているわけで、またわれわれの体を作っているのは素粒子ですからね。縁がないとは言わせないわけです。

私は先ほどご紹介にあったように東京大学の物理学科に移りまして、大学院学生に宇宙線の講義をやってくれと言われたのです。ご存じかと思いますが、私は中学のときに小児麻痺、ポリオと呼ばれる病気をやりまして、この後遺症で右腕が使えないのですね。特に黒板に白墨（はくぼく）で字を書くというのは、わたしには大変な仕事なのです。ですから、黒板に字を書くのは、もうできるだけ少なくしようというわけで、最初の講義のときに、まず左の端に「宇宙」と書いて、ここ数年、われわれの宇宙に対する理解は急速に進歩してきたと、それからもう一つ、右の端に「素粒子」と書きまして、素粒子の分野も最近の理解の進歩は目覚ましいものがあると。どうやら素粒子に対する物理学的な理解と、宇宙に対する物理学的な理解というのは、結局は一つのことになるらしい、実際にうんと小さい素粒子の物理と、うんと大きい素粒子の物理が、どのようにつながるのかは、まだ分かっていないけれども、わたしの山勘（やまかん）では多分ニュートリノがその役割を果たしてくれるだろう、と書いたわけです。書いた字は、これで全部終わりですけれどもね。でも、何十年かたってみましたら、ここに言ったことは、ある程度は当たっていたということです。

これは、よく宇宙学者が講演するときに使う図

プロフィール

1951年　東京大学理学部物理学科卒業
1953年　ロチェスター大学大学院フルブライター
1970年　東京大学理学部教授
1987年　東京大学名誉教授
2002年　ノーベル物理学賞受賞

1985年のドイツ連邦共和国功労勲章大功労十字章受賞をはじめ、文化功労者、文化勲章など、数多く受章

ですが、真ん中に人間がいまして、大体１メーターとか２メーターという大きさですね。右のだんだん明るいほうへ行きますと、地球、太陽、それから銀河、あるいはグレートウォールなどと、だんだん大きなスケールの現象が書いてあります。いま一番大きな望遠鏡でのぞける星がどのくらい遠い所にあるかといいますと、50億光年といわれています。光年というのは、年という言葉がついていますけれども、時間を測る単位ではなくて、これは距離を測る単位なのです。光というのは、１秒間に地球を７回り半ぐらい走ってしまうくらい速いのですね。その速い光が１年間かかってようやくたどり着けるその距離が１光年といわれる。その長い単位で測っても50億年かかる50億光年、そのくらいがわれわれの今知りうる宇宙の限界です。

そのようにして調べてみますと、非常に驚いたことには、遠い天体ほど、その距離に比例して遠ざかっている。この「距離に比例して」というのがミソなのです。ですから、逆に時間を動かして過去を振り返ってみると、２倍遠いものは２倍の速度で近づいてくるというわけでしょう。３倍遠いものは３倍の速度で近づいてくる。ですから結局は、ある時間、過去になりますと、すべての天

体が一か所に集まってしまう。このようなことになるわけですね。それを勘定してみますと、大体135億年前には宇宙のすべての物が一か所に集まっていたということになるわけです。そこで今、物理屋、天文屋は、宇宙はその時刻にビッグバンと呼ばれる一大爆発から宇宙は始まったのであると考えています。

あなた方が想像されてもすぐ分かると思うのですけれども、そのようにたくさん散らばっている物を一か所に集めますと、これは温度がどんどん高くなるでしょう。それと同時に密度もうんと高くなるわけですね。そのような高温度、高温度というのは何かというと、そこにある粒子がものすごいエネルギーで跳び回っているということですね、温度が高いということは。しかも密度がうんと高い。ですから、もう粒子同士はガチャガチャぶつかり合っているわけです。まさにそのようなことこそ、素粒子物理の解明しようとしていることなのですね。

（中略）

わたしはよく質問されて、科学のどういうところが楽しいのですかなどと言われるけれども、これは科学が楽しいなどということを口でいくら説明しても、絵を見せても、なかなか感じるものではないのです。こればかりは、あの阿波踊りと同じで、自分でやらなければどうしようもないわけですね。ただ、少しこのようなことをやれば、もう少し素粒子というものを身近に感じてくれるかなあという願いで、素粒子をどのようにして観測するかという話をちょっとします。

素粒子にも電気を持った粒子と、電気を持たない中性の粒子とがありますけれども、中性の粒子は、これはまあタチが悪いやつはなかなか観測できないのですよ、あとで話しますけれどもね。電気を持った粒子は、クーロン力というご存じの力が働きますけれども、物質の中を通りますときに、中にある原子をクーロン力で外側の電子をパーンとはじき出すわけです。そうすると、その元々電気的に中性であった原子が、プラスの電気を持ったイオンと、マイナスの電気を持った電子とに分かれるわけですね。そのようなイオンを走っている道筋に沿って、ポツンポツンと作っていってくれるわけです。それはありがたいのだけれども、１個のイオンなどというものすごく小さいものですから、これは見えるはずはないのですよ。

では、どのようにして見るか。それを見る方法は、皆さんがよく晴れた日に空を眺めて、ジェット機が飛行機雲を作っているのをご覧になった方がいると思います。あの飛行機雲を観測すれば、飛行機自体は小さくて見えなくても、この飛行機雲がどちらの方向に、どのくらいの速度で延びていくかを観測すれば、ジェット機がどちらの方向に、どのくらいのスピードで飛んでいるかというのが分かるわけです。

（中略）

ニュートリノは、強い相互作用を持たないで、弱い相互作用だけですから、地球でも、太陽でも、すうすう通り抜けてしまうわけです。ですから、その弱い相互作用でほかの粒子、例えば電子とか陽子に衝突してくれる確率はものすごく小さいのです。例えば100兆個のニュートリノが飛び込んできて、そのうちの一つが検出器で電子をたたいてくれるかどうかというようなものです。けれども、それを待つよりほかに手はない。

そのようなことで、これはわれわれのやった「カミオカンデ」という実験ですけれども、3,000トンの水を地下1,000メートルに蓄えまして、周りを光を検知する装置で覆っています。ニュートリノがやってきて、ごくまれにですけれども、水の中の電子をたたいてくれる。電子が大体前の方向に飛び出すのですが、一度電子になってくれると、これは観測ができます。電子が水の中を走ると、光の衝撃波とでもいうべき「チェレンコフ光」というのが、この軸に沿って円すい形に飛び出してきます。この光を周りの光検出器で、ここには光がいつの時刻に、何発来たかということをずうっと測定しますと、それから逆算して電子がどこから、どちらの方向へ、どのくらいのエネルギーで走りだしたかということが分かるわけです。これが分かったら、これをたたき出したニュートリノはこちらの方向から来て、いつここへ届いて、そのエネルギーの分布は、このたたき出された電子のエネルギー分布から逆算して、このようなエネルギーの分布を持っていたのだということが分かるわけです。

ができるわけです。

（スライド説明略）

時間を超過してしまったかもしれません。どうもありがとうございました。

（ご講演内容の一部を掲載させていただきました。全文をご覧になりたい方は、http://www.fulbright.or.jpをご覧下さい。）

Sadako Ogata Speaks to Fulbrighters

Cultivating Understanding---Within and With Others

米国のフルブライト同窓会であるフルブライト・アソシエーションは、毎年国際理解に顕著な貢献をした世界中の個人・グループ・団体の中から1名を選び、ウイリアム・フルブライト賞を授与してきましたが、2002年は前国連難民高等弁務官（現JICA理事長）緒方貞子氏が受賞されました。ワシントンDCでのこのスピーチは2002年10月11日、フルブライト・アソシエーション第25回大会の授賞式において、会場を埋めた数百人の米国及び世界23カ国のフルブライターを前にして行われたものです。落ち着いた力強いスピーチに、聴衆は3回にわたるスタンディング・オベーションで緒方氏を称えました。

なお、2001年の受賞者はコフィ・アナン国連事務総長、今年の受賞者はフェルナンドH・カルドゾ前ブラジル大統領です。

緒方貞子氏はこのウイリアム・フルブライト賞受賞を記念して、日米教育交流振興財団に10,000ドルを寄付されました。財団はこれをもとに2003年度冠奨学金として緒方貞子／フルブライト奨学金を設定し、現在Ms. Kristine E. Vekasiが東北大学大学院において政治学を研究中です。

Photo courtesy of Dave Scavone

It is indeed a great honor and pleasure to be awarded the J. William Fulbright Prize for International Understanding in the 50th anniversary year of the Fulbright exchange program between Japan and the United States and the 25th anniversary of the Fulbright Association. I am happy to inform you that this year a series of commemorative events have taken place in Japan and in the United States, renewing the commitments to international friendship and understanding that originated with the Fulbright experience and grew in the succeeding years.

Although I was not a recipient of the Fulbright fellowship award, I married Shijuro Ogata, a 1954 grantee. I went to the United States as a Rotary Foundation Fellow. We often joked over whether Shijuro was fully-bright in comparison to me who would only be half-bright. Whatever the outcome, we belonged to the new generation of post war Japan who benefited from the opportunities that opened up to go to the United States and to witness the working of democracy and freedom.

At the time Japan was just beginning to recover from the defeat in World War II. The country was making tireless efforts to rebuild the economy mingled with strong internationalist and pacifist idealism. The United States was basking in the growing confidence in its ability to lead the world. There was an extraordinary openness, a true internationalist spirit.

Many professors and students I met on campus were refugees and migrants. Being at American universities in those days was like being at the source of American power, intellectual and technological progress backed by democratic and open competitiveness. Returning home, these exchange students from Japan, the large number of which at the time were Fulbright grantees, more and more assumed leadership positions. They were very much leading Japan's miraculous economic growth covering bureaucracy, business and academia. What should be noted is that Japan generally followed a pacifist, internationalist course remaining closely allied to the United States.

The Fulbright alumni, for example, were behind the initiative to collect funds for the continuation of the Fulbright exchange program, which was beginning to scale down. The call for international contribution, marked the policy platform by successive prime ministers, from Fukuda, Nakasone and those who followed. Internationalization was still the social and economic goal of the times. Japan became the largest provider of overseas development assistance.

The end of the Cold War, however, marked a significant departure from the internationalist course in both the United States and Japan. The cause was the demise of the communist threat that had bound the two countries closer. As Japan became the largest creditor nation of the United Sates by the late 1980s, Japanese economic power was perceived as a threat by the Americans. An arrogant mood surfaced on the Japanese side leading to complacent and nationalist trends. The public commitment of the United States to provide international leadership on the other hand, began to recede.

The mood in government, congress, media, civil society associations became increasingly inward-looking, with internal politics dominating the agenda. Calls for international understanding could not sway the public in either Japan or in the United States.

The 1990s, on the other hand, were extraordinarily charged times, when conflicts broke out in many continents of the world, and massive flow of refugees dominated the international scene. In January 1991, I was elected the United Nations High Commissioner for Refugees to protect and assist those who fled across borders. Within weeks after my arrival, almost two million Iraqi Kurds fled to Iran and Turkey. In the following years, another four million became displaced in the Balkans, as the Socialist Federal Republic of Yugoslavia disintegrated. Another two million refugees fled from Burundi and Rwanda after the genocide in 1994. The six million Afghans were the largest single refugee group when I assumed office, but even after the withdrawal of the Russian troops, remained the largest due to the conflicts among the Afghan war-lords. The major characteristic of the refugee flight of the 1990s was the fact that they were victims of internal wars, caused by ethnic, religious and political divisions. Violence and violation of human rights featured their fate. Ensuring physical safety and survival dominated UNHCR's protection concern.

While many were able to cross international borders and were given protection and assistance, many others were displaced inside their country. They could hardly be protected or be given humanitarian assistance. The growing number of the internally displaced, was another notable feature during this period. Various ways were sought to ameliorate their plight, but the sovereignty issue frequently blocked an enduring solution.

As I grappled with the causes and consequences of the internal conflicts on a daily basis, I realized how serious was the suffering of the vast majority of these fleeing people. Whether in Bosnia, Rwanda, Burundi, Sierra Leone, Chechnya, they were trying to escape from the cruelest of man's inhumanity – genocide, ethnic cleansing, and massive violations of human rights.

These were people who faced death and threats from people who used to live not only in the same country, area or community, but even neighborhood. Moreover, when the conflict ended and time came for the refugees or the displaced to return, I had to cope with the problem of reintegrating them back to broken communities or neighbors, with lingering memories of hate and suspicion. This is when I faced the challenge of reconciliation as the central issue in post-conflict transition.

The models of international understanding or diplomatic negotiation were not quite sufficient to address the problems of rebuilding war-torn communities. What we urgently needed were communication models directed towards reconciling broken communities and peoples. With inspiration gained from a group of academics who had worked on reconciliation projects in violence-ridden American inner cities, UNHCR launched an initiative which was called, Imagine Coexistence.

The challenge was to devise projects that by necessity brought people together for common purposes. We carried out pilot projects in Bosnia and Rwanda that introduced job-sharing experiences. There were training and networking projects for women. I was quite excited to come across a bakery run by Serb and Croat women in what had been one of the worst areas of confrontation. Education should also be examined in the context of promoting coexistence. Sports and recreation opportunities also have enormous potential.

I learned in an American army newspaper that some soldiers started a football team in Kosovo composed of Kosovo, Albanian and Serb children. The particular site was where children had to have military escort to go to school, when I visited the area the year before.

Promoting international understanding will remain vital today. The process of globalization that moves goods, money, people and information across borders will continue to challenge all of us. We have to take full advantage of the opportunities that are in front of us. However, understanding and respecting people with different cultures, languages and living modes will require even greater and more conscious efforts. At the same time, we will have to strive hard to reach mutual trust and coexistence among people within our own national borders.

Having worked as chief of an agency that protects and assists extremely vulnerable people, the refugees, I find that security and prosperity of any society must be based on solidarity. Excluding certain groups of people, or neglecting measures to help the weak, are sure ways to sow the seeds of division and conflict which eventually erode societies from within.

As we face the challenge of terrorism today at the beginning of the twenty first century, we should reflect deeply on the fundamental causes of conflict and division that drive people to extremist action. Cultivating understanding, not only across nations but also within nations, provides a sure answer to peace and stability. Cultivating understanding is promoting respect and solidarity among different peoples and communities. I challenge the Fulbright Association and colleagues to renew your commitments to reinforce understanding, internationally but also nationally.

Thank you very much again for the honor.

(Presented Oct. 11, 2002 at a ceremony at the Ronald Reagan International Trade Center, Washington, D.C.)

■随想■

遺産1億3,500万円をフルブライト財団に遺贈された
三上泰永さんの思い出

堀江　昭　フルブライト留学第一回生

1952年に日本からのフルブライト第一回留学生としてテキサス大学で学ばれた都留文科大学名誉教授、三上泰永さんは昨年12月に亡くなられたが、遺産約一億3580万円を(財)日米教育交流振興財団、通称フルブラト財団、に遺贈された。

1952年7月、われわれフルブライト留学生のテキサス大学でオリエンテーションを受けるグループ23名は、パンアメリカン航空の当時の最新鋭機ストラトクルーザーに乗って羽田を出発した。三上さんも私もその中の一人であった。サンフランシスコに立ち寄って、写真にある様に、その前の年の1951年に講和条約のサインがされたオペラハウスの見学をしたりしてから、テキサス大学の所在地、テキサス州の首都、オースチンに到着した。二ヶ月間のオリエンテーション終了の後、われわれ23名は別れ別れとなり、それぞれの留学先の大学に向かったが、三上さんはテキサス大学で一年間の勉学の後、Bachelorの学位を取得し帰国された。帰国後、1956年には早稲田大学で修士号を取得され、1964年に都留文科大学文学部英文科の講師となり、1972年に教授に就任された。1995年に退職、名誉教授になられた。

三上氏（2列目左端）　堀江氏（前列右から4人目）

ローン・スターの前で三上氏

戦後、1949年から占領地域対策のためのガリオア資金による留学生制度があり、当時これが唯一の米国留学の公的制度であり、われわれも1951年にこの留学生試験を受けたのだが、講和条約が出来て占領が終わったのでガリオアが廃止され、1952年にフルブライト留学制度に切り替えになり、第一回生となった。

それまでは同年度の留学生が全員同じ軍用船で渡米していたのが、フルブライトになってから我々の年には民間機で渡航することになり、オリエンテーションの場所毎に一つのグループとなって大学に向かった。そこで英語教育とアメリカについてのオリエンテーションが行はれ、メキシコとの国境まで行く泊り掛けの見学旅行もあった。三上さんのテキサス州、the Lone Star State、の旗と写っている写真はHoustonを見学に行った時のものである。われわれは、欧州、中南米、アジアからの留学生とともに、夏休みで空いている大学内の立派な学生寮に住はせて貰い楽しい二ヶ月間を過ごした。

当時のガリオア、フルブライト留学制度は、現在のフルブライトと違って、専門分野の勉強に行く人を選ぶよりも、英語の解る日本人を沢山米国に送って、米国のよいところを見聞させ、それによって日本の民主化、親米化を図ろうとする米国占領政策の一環という色彩の強いものであった。従って筆記試験は英語だけで、専門分野の知識がなくても、英語の力があれば、私や三上さんの様な3月に大学や高等専門学校をを卒業したばかりの学生も受け入れられた。われわれの23人の中で、1929年6月生まれ、23歳の三上さんが一番若く、同じ1929年の2月生まれの私が二番目に若いという状況で、40歳近い方もおられる中でわれわれ二人は世間知らずの若造という存在であった。戦後の貧しい日本から夢の様に豊かな米国へ来て、何もかも感心するばかりであったが、三上さんや私が生意気にも批判的な眼を向けたのは、当時のテキサスでの人種差別であった。当時テキサス大学には一人の黒人学生もおらず、黒人は全部黒人専用の大学へ行く制度であり、写真にある様にバスターミナルの水飲み場も黒人用と白人用とに別れていた。バスでは黒人は後の方に座る様にサインが出ており、日本人は白人待遇だから白人と一緒に前の方に座る様にと事前に教えられていたが、三上さんは黒人と一緒に後の席に座らうとして運転手から注意された事がある。この様に正義感が強く、言いたいことは言うという人であったという印象が残っている。最近、都留大学の先生に三上さんの事を伺って時に、時流に阿ったやり方や、曲がった事が大嫌いで、大変厳しい先生であったとお聞きし、当時の三上さんらしさを貫かれたと感じた。

残念な事はこのテキサス　オリエンテーションのグループは一緒にいたのが二か月のみで、その後の留学期間が長かったせいか、私も留学先のコロラド大学、ハーバード大学やフルブライトの同窓会には積極的に参加しているが、このグループで帰国後に会合する機会はなかった。私はテキサス大学OB会の日本支部の活動にも積極的に参加しているが、三上さんをOB会にお誘いする事も出来ず、51年前にお別れしてから音信不通であった事は本当に残念に思い反省している。私は三上さんが亡くならたのを知らず、フルブライト財団から、私が三上さんと同期である事を見つけて御遺贈の話を御連絡戴いた。この機会に、同じオリエンテーション　グループの方々に御連絡する様にいろいろ努力したが、連絡先の判らぬ方が多く、電話でお話できたのはほんの数人の方で、三上さんの事を記憶しておられた方はお一人だけで、50年の時間の経過を実感した。

三上さんが遺贈奨学金は米国に留学させてもらった御礼に、日本で学ぶ米国人学生のために使う事を希望されたと伺っているが、その様な気持ちに三上さんがなられたのは、テキサス大学での勉強、生活が三上さんの生涯に大きく貢献したことへの感謝の気持ちから出ていると思う。三上さんの同級生だったMr. Downesという人に、テキサス大学のInternational OfficeのMr. Wilcoxに頼んで問い合わせて貰ったところ、“Mr. Mikami was especially appreciative of the programs and services provided by Dr. Joe Neal and his staff during his time in Texas.”というお話があったとの事である。Dr. Nealはわれわれがテキサスにいた時のInternational OfficeのHeadで家族ぐるみでわれわれに親切にしてくれたが、その様な事が三上さんの今回の遺贈の動機になったと推測される。Dr. Nealは今でも御健在で私は昨年オースチン訪問の際お会いしてきた。

堀江氏（三上氏撮影）

皆さんご存知の通り、われわれガリオア　フルブライト同窓生は、今までに何回が同窓生からの寄付金募集を行い、又企業からの冠奨学金をお願いし、そしてチャリティゴルフ会を毎年開催するなど、米国で勉強させて戴いた御礼に米国からの留学生を招く活動を行って来た。その様な活動があったからこそ、三上さんも財団に注目され、そして御遺志も確実に具体化する事が出来るのであって、われわれ同窓生が長年に亘って活動を続け、拡大してきた事がお役に立って本当に嬉しく思う次第である。

今後三上さんのようにフルブライト財団の活動を支持する寄付、遺贈が更に増加することを祈りたい。

「三上泰永様からの電話」

02年1月7日（月）午前、事務局に次のような電話がありました。「日米教育交流財団（財団）は、何故直ぐ免税団体であることが分かるように、NPO法人の資格をとらないのか。また、何故寄付の3%の手数料を同窓会の飲み食いのため支払うのか。質問をする理由は、これまで41年間大学で英文学を教えてきたが、現在入院中で、独身を通してきたので、自分の死後全財産を処分し、財団に遺贈するとの公正証書遺言を作ったからである。」

財団は法人格を持ち、免税措置も受けていること、また募金手数料は同窓会の飲み食いではなく、個人募金活動の印刷費、郵便料等に使われることをご説明し、ご納得いただいた後も、日本の教育の現状、日本人の昔と変わらぬメンタリティについて嘆いておられました。これが、三上泰永様と遂にお目にかかることなくお話しした、最初で最後の長い電話でした。

02年2月5日、お礼とお見舞いにお伺いすることついて、三上様のお世話をしておられた、NPO法人日本生前契約等決裁機構の杉山歩アドバイザーを通じ、「何も残らないかもしれないから、そうなった時、もやいの墓に花でもあげてくれればよい。」とのご意向が伝えられました。日本生前契約等決裁機構は、生前に、死後のため契約した公正証書遺言が、完全に履行されているかを監視し、遺産管理、清算を行うため、02年2月に発足したNPO法人です。

03年2月19日、日本生前契約等決裁機構から、02年12月7日三上泰永様は享年73歳で逝去され、遺産は公正証書遺言にもとづき、財団に寄贈されることが説明されました。

03年3月26日、5分咲きの染井吉野が美しい巣鴨の染井霊園北端にある、「もやいの碑」の石碑に刻まれた三上泰永様のお名前を確認し、献花とご冥福をお祈りしました。

03年4月25日、千代田区霞ヶ関の弁護士会館において、田村達美日本生前契約等決裁機構理事長から内古閑俊二財団理事長に、三上様の遺贈第1回支払分120百万円の目録贈呈式が行われました。式には、高澤廣茂財団監事、南原晃同窓会会長代行・副会長、サムエル M. シェパード日米教育委員会事務局長も同席され、この模様は、毎日新聞03年4月27日東京版に写真入りで大きく報道されました。遺贈額はその後の不動産売却分等を含め、最終的には約135百万円にのぼります。

財団では三上様の遺志に沿い、冠奨学金「三上基金」を設定し、初年度の03年は、三上基金／フルブライト冠奨学生としてMr. Todd A. Henry が、京都大学大学院においてアジア史を研究する予定です。

03年12月5日、三上様が長年教授を勤められた都留文科大学では、三上教授の1周忌にあたり、追悼講演会を開催、サムエル M. シェパード日米教育委員会事務局長が講演されました。

（正野敏夫）

Kazuko Kamimura: the Fulbright Program Personified

Samuel M. Shepherd, Executive Director, JUSEC

Mrs. Kamimura & JUSEC Chair Hugh H. Hara

Memories of Kamimura-san begin and end with her extraordinary commitment to and love of the Fulbright Program. Almost every thing seemed to flow from this: her integrity, her warmth, her humor, her institutional memory and her wisdom. Somehow it is hard to separate Kazuko Kamimura from her passion for the Fulbright Program. Certainly one of my strongest memories of her is her insistence on quality and excellence in carrying out the work of the Commission. Time and time again she would insist on certain language and a certain way of doing things, when there may have been quicker, more efficient alternatives.

Of course, by the time I came on board in 1994, Kamimura-san was THE JUSEC institutional memory. She was quite remarkable in recalling names of alumni from over the years. She would talk about their contributions and accomplishments. Staff are fond of recalling how she would identify a young Fulbright grantee as having great potential, then many years later, lo and behold, the person would be a leader in his/her field.

Personally, I don't know what I would have done without her, especially in the first months of my tenure as Executive Director. She not only provided accurate and substantive information on the history, operations and principles of the Fulbright Program but also about individuals and organizations that were key to the effective administration of the Japan-US Fulbright Program.

Kamimura-san had an extraordinary command of both her native Japanese and her second language, English. When speaking, she had a marvelously charming way of using one and then the other, sometimes within one "paragraph". At first, I was a bit frustrated by this since I had, my whole life, been accustomed to not mixing the two languages. When I was in an English speaking environment, I used English, when in a Japanese speaking environment, Japanese; "never the twain shall meet." But over the years I finally more or less adapted to her style - using the language of convenience, at least with Kamimura-san! "Tekitoni".

We also laughed a lot together, in the office but especially on our many business trips, most to visit universities throughout Japan. One incident that I can tell on myself had us both aghast and in stitches at the same time. We were coming back rather late from some visits in the Kansai area and decided to split a small bottle of wine. Kamimura-san, in fact, did not drink much but she was kind enough to keep me company. Well, we were sitting there enjoying our conversation, probably on some aspect of our visit, when, with out warning, the person in front lowered his seat back. Before I knew what was happening, the seat back had bumped over the bottle of wine - red at that - and spilled all over the front of my pants. I didn't know quite what to do, but Kamimura-san immediately came to the rescue with tissues. I felt totally embarrassed, but it was such unexpected and bizarre occurrence that we couldn't help seeing the comic side as well. We had a very good laugh. [Fortunately, I had a

change of slacks with me!]

Kamimura-san could be quite exacting as well, particularly when it came to Fulbright principles that she felt should not be compromised. One such principle was the peer review process, and the importance of having a very thorough documentary and interview process - without compromising peer review. For the sake of argument, I would suggest from time to time that perhaps the interview process did not have to be done on a strictly discipline (by field) basis; that the interview panel could perhaps look at aspects of the applicant that could be done across disciplines. She would have none of it. That would be too much of a compromise.

Kamimura-san was my "sempai" when it came to the East-West Center. We were both recipients of EWC grants, but she was at the Center a year or two before I was. Nevertheless, we enjoyed swapping EWC stories, and going to alumni association meetings together. She was very proud of being an EWC alum, her first and only study abroad experience. Her time in Hawaii, and "field study" in Wisconsin, had a great impact on her life and undoubtedly influenced her decision to come to work for the Fulbright Commission.

When I asked our staff at JUSEC to share with me some memories of Kamimura-san, many of the things I have already mentioned came up, but they invariably also talked about the "tone of excellence" that she set in the office, from matters of principle to office comportment. She was a stickler for "kejime", and insisted that her staff and fellow workers adhere to a standard befitting the Fulbright Program.

Interestingly, one of my earliest and fondest memories of Kamimura-san was from before I came to JUSEC as executive director. We were both attending one of the annual conferences of NAFSA: Association of International Education. This particular one was in San Francisco, as I recall. At one of the conference functions, she had won dinner for two at an Italian restaurant. For some reason, some of the others she might have gone with had other plans. We had known

each other for some time, and I was standing around so she laughingly said, "Mr. Shepherd, are you hungry?" or something nonchalant like that. Well, I of course jumped at the chance for a free meal. I don't remember exactly what we talked about but I do remember we had great fun. I had no idea at the time that, a few years down the line, I would be her "boss" back in Tokyo!

Without question, Kazuko Kamimura has left a profound legacy, not only with us here at the Japan-US Fulbright Program but also among the staff of other Commissions, especially across Asia. All of us are better human beings because of our encounter with Kamimura-san. We all hope that some of her integrity, wisdom, respectfulness and kindness have rubbed off. Thank you, KK-san!!

****

Kazuko Kamimura graduated from Japan Women's University in 1964. She then studied at the University of Hawaii as an East West Center Scholar, graduating with a Masters degree in 1966. She started working for the Fulbright Commission in 1966, first as a Junior Program Assistant, working her way up to Program Officer. She retired in 2001 and became Senior Advisor for 50th Anniversary Activities before prematurely passing away in May of 2002 at the young age of 60. Kazuko Kamimura truly believed in the Fulbright spirit and left a significant portion of her estate to the Fulbright Program in her will. She will be terribly missed by all who had the good fortune to know her.

2003年度 東京同窓会総会

会長挨拶

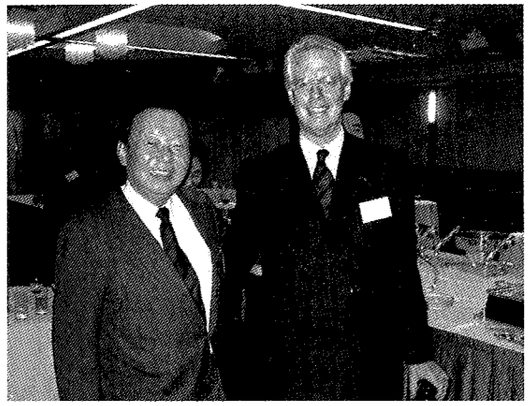
東京同窓会会長を務めております、ＮＥＣの金子尚志でございます。1960～62年California大学Berkley校に留学したフルブライターでございます。

本日は大勢の同窓会メンバー各位にお集まり頂き誠に有り難うございます。本日は50周年記念事業報告のご報告もありますが、後ほど今回ノーベル物理学賞の栄誉を受けられた小柴昌俊先生（53年のフルブライター）のご講演がありますので、私の挨拶は簡潔に致したいと思います。

昨年は、1950年ガリオア制度からフルブライト制度に移行されてから丁度50周年に当たります。これを祝って諸行事が企画され、賀来記念事業実行委員会委員長の下で周到な準備が進められ、それぞれ盛大に挙行されました。

まず、「50周年記念公開講演シリーズ」が1999年11月から3年間に亘り半年毎6回のシリーズとして開催され、船橋洋一、明石康、河合隼雄、榊原英資、犬養道子、本間長世、キャロル・グラックの諸氏が講演されました。続いて、昨年5月8日「日米フルブライト記念切手」の発売に始まり、5月9日サントリーホールでフルブライト音楽祭が開催され、また5月20日から1週間に亘ってフルブライターによる美術展が国際フォーラムにおいて開かれました。

メインの記念行事として、5月25日夕方約300名の出席者を得て東京国際フォーラムでレセプションが開催され、天皇皇后両陛下の行幸啓を賜りました。翌26日には皇太子殿下・同妃殿下の御臨席の下、またPatricia de Stacy Harrison米国国務次官補、遠山敦子文部科学大臣、Harriet Fulbright未亡人、Caroline 又野 Yang前日米教育委員会事務局長、その他来賓並びに約450名の出席者参加のもと華やかに50周年記念式典が挙行され、皇太子殿下よりお言葉を頂戴しました。この席上、フルブライト・プログラムに長年功績のあった日米2名ずつ4



人の受賞者に「フルブライト賞」が授与されました。また、この席で、かねてより進めてきた「フルブライト50周年記念募金」が1651名の会員から総計4,000万円を超える金額に達したことが報告され、米国人留学生の招聘資金として日米教育交流振興財団に寄贈されました。ついでシンポジウムが開催され、山崎正和氏の基調講演他、パネル討論が行われましたが、その内容は中央公論新社から「21世紀の知的交流と日本」として出版されております。お陰様で50周年記念行事はすべて盛会のうちに終了致しました。

記念行事の一環として、昨年9月20日から約10日間「アメリカ再発見ツアー」が催されました。約50名の会員とその家族が参加して、Boston、New York、Washington他米国各地を歴訪し、各地で講演会、シンポジウム、交流会、音楽会、米国での記念行事等に参加し、また自分の留学した母校を訪問し懐旧の情に浸ったり、両国の友好増進にそれなりに寄与できたのではないでしょうか。

昨年も10月28日恒例のFulbright Charity Golfが催されました。住友商事会長宮原賢次さんと、在日米国商工会議所会長Robert Grondineさんとの両co-chairの下で130名の参加者を得て開催され、約500万円の収益金が財団に寄贈されました。

また、例年のごとく昨年11月に米国人フルブライト留学生の歓迎会が行われましたが、詳細は会務報告をご参照下さい。例年の如く来日フルブライターの為の成田出迎え、最高裁判所・国会見学や、日光・益子ツアー、FMFへのボランティア協力等に、同窓会会員各位にご尽力いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

また、昨年12月には日米教育委員会前事務局長

のCaroline 又野 Yangさんが来日され、この機会にShepherd事務局長と私も参加し各地のガリオア・フルブライト同窓会を歴訪・懇談致しましたが、地方同窓会との交流として誠に有意義でありました。

尚、過年度サンフランシスコ平和条約締結50周年記念事業の一環としてA50事業実行委員会（大河原良雄会長）による募金活動が行われましたが、この内奨学金引当額は財団法人日米教育交流振興財団に寄託され、「A50フルブライト奨学金」として米国からの留学生招聘に寄与しております。

また、昨年10月元国連の緒方貞子様が米国2002年ウイリアム・フルブライト賞を受賞されましたが、その記念に当財団に10,000ドルのご寄付を頂きました。

一方、昨年5月逝去された上村和子元日米教育委員会交流部長から500万円の遺贈を受け、また12月に逝去された1953年フルブライターの三上泰永様からは、遺産約1億3,500万円が財団に遺贈されたことをご報告致します。

さて、50周年記念行事はすべて成功裏に終了しておりまして、本年の事業計画は再び定例の行事に戻ることになります。今年のFulbright Charity Golf Tournamentの日本側委員長には、経済同友会の新代表幹事に就任された北城恪太郎日本ＩＢＭ会長にお願いし、米国側は昨年に引き続いてRobert Grondineさんが担当されます。トーナメントは来る10月27日（月）に戸塚カントリー倶楽部において開催されます。皆様方のご参加をお待ちしております。

さて、本同窓会の中長期課題として、年々会員層が高齢化する現実の中で、今後いかにフルブライト同窓会の活性化を図るか、財団の財政基盤を厚くする活動等の議論がなされております。この際同窓会の名称自体を変えたらどうかとか、同窓生のみならず冠企業・団体および一般個人に対する募金活動を毎年実施したらとかの提言もなされており、今後とも皆様からの更なるご提言を期待致します。

以上で私のご挨拶は終わりますが、この機会に、日頃お世話になっております日米教育委員会のShepherd事務局長、日米教育交流振興財団の内古閑理事長、同窓会の役員各位の他多くの関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

なお、一言付け加えさせていただきますと、本日ご出張のため出席されておられませんが、日米教育委員会のShepherd事務局長には、皆様ご承知の通り、1994年からフルブライト・プログラムはもとより、我々同窓会の発展に大変ご尽力いただいて参りました。ご本人からお聞きしたところによりますと、来年2月には、事務局長になられて丁度10年になられることから、一つの区切りをつけ、米国へお帰りになるとのことであります。我々としては誠に残念でございますが、まだ来年2月まではこちらにおられますので、しばらくはこれまで同様ご指導いただきます。この席をお借りし、今日まで、Shepherd事務局長が日米教育交流に果たしてこられました大きな役割と成果に、心から敬意を表し、感謝申し上げたいと思います。

2003年度総会での各種報告

2003年度役員

●会　長；金子尚志
●副会長：南原　晃(会長代行)　佐藤ギン子
　有馬朗人　小西輝明　白鳥正喜
●Alumni Meetings 委 員 長：小中陽太郎
　副委員長：日比谷潤子
●Hospitality 委 員 長：太田隆次
　副委員長：島田道子
●Publicity 委 員 長：定森大治
　副委員長：江端貴子
●監査役：原田敬美

2002年度決算・2003年度予算(単位：千円)

	2002年度決算	2003年度予算
Ⅰ　収入の部		
会　費	4,724	4,740
寄付金	58	30
募金手数料	2,069	826
受取利息	2	2
ＰＣ賃貸料	240	240
当期収入（A）	7,093	5,838
前期繰越	18,073	17,254
収入合計（B）	25,166	23,092
Ⅱ　支出の部		
旅費交通費	82	100
通信費	1,400	1,300
印刷製本費	681	550
什器備品費	65	80
修繕費	102	100
消耗品費	50	30
地代家賃	289	260
会合費	428	0
倉庫料	144	130
事務用品費	100	100
給料手当	2,377	2,360
奨学生費	29	310
支払手数料	12	20
図書購入費	4	10
会議費	42	100
雑　費	30	50
予備費	408	300
当期支出合計（C）	6,243	5.800
当期収支差額（A）－（C）	850	38
50周年記念出版	2.315	—
購入予約入金（E）	−646	—
次期繰越（B）－（C）－（D）＋（E）	17,254	17,292

2002年度会務報告

02.4.19	2002年度総会及び懇親会（於東京會舘） 講演者　野中泰二郎中部大学教授　出席者会員34名、シルバー会員40名、そのほか16名、合計90名
02.5.9	フルブライト音楽祭（於サントリーホール） 参加者1,025名
02.5.20～26	フルブライト美術祭（於東京国際フォーラム） 参加者1.336名
02.5.25	フルブライト公開講演会（於東京国際フォーラム）参加者290名。講演者　本間長世成城学園長　他
02.5.25	50周年記念レセプション（於東京国際フォーラム）天皇・皇后両陛下ご臨席。参加者310名
02.5.26	50周年記念式典（於東京国際フォーラム） 皇太子・同妃殿下ご臨席。50周年記念募金40百万円贈呈。講演者　山崎正和東亜大学学長　他。参加者440名
02.5.29	アメリカ人フルブライターの為に最高裁判所及び国会の見学会。 参加者12名（フルブライター8名、その他4名）
02.618	FMF夕食ボランティア会員23名協力
02.6.25	FMF都市同行ボランティア、市原市・伊那市に会員各1名計2名同行
02.9	成田出迎え
02.9.20	アメリカ再発見旅行。 参加者会員等50名。コンサート（於ハーバード・サンダーズ・シアター）ボストン総領事レセプション（於ハーバード・ファカルティクラブ）
02.9.21	記念シンポジウム（於ボストン・チャールズホテル） 講演者　ローレンス・サマーズ＝ハーバード大学学長　他
02.9.23	記念シンポジウム（於コロンビア大学ケロッグ・センター） 講演者　ボリンカー＝コロンビア大学学長他。I.I.E.カウフマン・ルーム）
02.9.25	ジョージ・ワシントン大学訪問。 講演者　ハリエット・フルブライト夫人他。国務省訪問　アーミテージ国務次官他面談。加藤良三大使主催レセプション（於旧日本大使公邸）
02.10	News letter Vol.15を発行
02.10.8	FMF夕食ボランティア会員18名協力
02.10.10～13	アメリカフルブライト同窓会25周年記念大会（於ワシントンDCマディソンホテル） 緒方貞子氏フルブライト賞受賞
02.10.14～15	FMF都市同行ボランティア、佐野市・鹿島市・大和市・町田市に会員各1名計4名同行
02.10.28	第27回日米交流チャリティ・ゴルフ大会（於戸塚カントリー倶楽部） 参加者130名　募金額約470万円
02.11.19	FMF夕食ボランティア会員27名協力
02.11.26	アメリカ人フルブライターの歓迎会（於グランドアーク半蔵門） 出席者　会員56名、グランティー10名、その他30名、合計96名
02.12.1～4	金子会長、シェパードJUSEC事務局長、ヤンJ.W.F.F.S.B.会長　札幌、福岡、京都、大阪、仙台各地区同窓会歴訪
03.3.3	2002年度役員会

新役員紹介

副会長
開原成允（かいはらしげこと）

11月21日（金）ニュー・グランティー歓迎会に先立ち、午後5：10から臨時役員会が開催され、開原成允氏の副会長就任が承認されました。会則により、役員選任は総会付議事項ですので、来年4月の総会において、副会長就任の追認を求める予定です。

＊1937年、東京生まれ。東京大学医学部卒。医学博士。1966～1969年ジョーンズ・ホプキンズ大学病院研究員。東京大学名誉教授。国立大蔵病院長をへて現在財団法人医療情報システム開発センター理事長、国際医療福祉大学副学長・大学院長。

パブリシティ委員長
定森大治

日本の大学の校友会とか県人会とかの案内や寄付を募る郵便は、ほとんど開封もしないで捨てている。それなのに米国の母校からの便りだけは、なにか愛おしさを感じて読み尽くしてしまう。なぜだろう。

おそらく、皆さんの中にも「そうだ」と言われる方が多いと思うが、私にとってフルブライト留学は、人生そのものを変えた衝撃的な体験だったからだ。青春というものが喜びと悲しみ、快楽と苦痛のカクテルだったとすれば、それを何杯も飲み干して酩酊状態になった時期。自分の思い通りにいかなかった悔しさは残る。あれもこれもやっておけばよかった、との悔やみもある。だが、いまとなってはすべてが懐かしさに包まれてしまうのだ。アイ・ラブ・ニューヨーク。

自分史の背骨になった留学体験の機会を与えてくれたフルブライト制度とそれを支えてきた多くの人々にお礼をしたい。それだけではなく、フルブライト留学生の皆さんが蓄積してきた知的な財産を再発掘してみたい。

私がパブリシティ委員長に推されたとき、「お断りする理由は全くありません」という返答が、考えたわけでもなく自然に口から出てきた。「時間がない、余裕がない」との逃げ口上が、フルブライトに限って言えば通用しないのである。

委員長として何ができるか、いまだにわからない。でも限りある人生の中で、よい意味での「特権」を手に入れた仲間たちと日本を考え、米国を考え、そして世界を考える場をつくりたい。日本のフルブライト・パワーに新たな活力を吹き込みたい。老人クラブではもったいない（ごめんなさい）。新機軸を昔飲んだカクテルの記憶に混ぜてみたい。どんな味になるだろうか。

＊1947年、広島生まれ。早稲田大学政経学部卒。米コロンビア大国際関係論修士。カイロ、ワシントン特派員などを経た後、現朝日新聞論説委員

パブリシティ副委員長
江端貴子

90年のフルブライト留学生として、マサチューセッツ工科大学の経営大学院に2年間留学いたしました。MITでの2年間は、キャリアばかりではなく、価値観や、人とのつながり、自分の性格形成にとって、貴重な体験となりました。こうした機会を与えていただいたフルブライトに何か恩返しをしたいと考えていたところに、ちょうどこのような大役を仰せつかることとなりました。諸先輩方のような功績、名声は、まだまだ残せませんが、元気さをとりえに、とにかく頑張っていこうと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

＊東京生まれ。横浜国立大学教育学部卒。米マサチューセッツ大学経営大学院修士。マッキンゼー・アンド・カンパニーのコンサルタントを経て、現在アムジェン株式会社取締役　CFO

日米交流チャリティー・ゴルフ大会

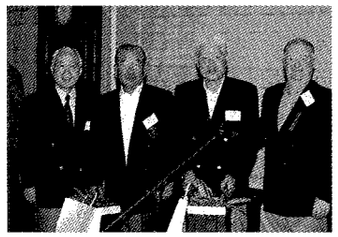
今年第28回目を迎える日米交流チャリティー・ゴルフ大会は、北城恪太郎日本アイ・ビー・エム株式会社会長とロバート F・グロンディン在日米国商工会議所前会頭が共同実行委員長を務められ、10月27日（月）戸塚カントリー倶楽部を会場に開催されました。この日は穏やかなすばらしい秋晴れに恵まれ、日米両国の170名にも及ぶ、近年にない多数の参加者が、クラブ・ハウス前に展示された、本田技研工業株式会社のご寄贈による、ピンクの最新モデル「ホンダ・フィット」を眺めながらコースに向かい、それぞれ存分にゴルフを楽しみました。

表彰パーティーでは、優勝者としてグロス85、ネット69.4を出された森元信吉TMT株式会社会長が駐日米国大使杯を獲得され、グロス73、ネット71.8の株式会社オハラの小原健司社長は内閣総理大臣杯を手にされました。和やかなパーティーは「ホンダ・フィット」のオークションがはじまると大いに盛り上がり、結局110万円の価格で落札されました。席上、この大会の収益金約4百万円の目録が、金子尚志ガリオア・フルブライト東京同窓会会長から内古閑俊二日米教育交流振興財団理事長に贈呈されました。参加者は全員、ゴルフを楽しみつつ日米の友好親善を深めた思い出と、多くの企業・団体から寄せられた価値ある賞品を手に家路につきました。

また、昨年10月28日（月）、同じ戸塚カントリー倶楽部で開催された、第27回大会は、宮原賢次住友商事株式会社会長とロバート F・グロンディン会頭が共同実行委員長となり、130名が参加して同じような好天気のもとで行われ、グロス99、ネット71.4の杉口昌三アナログ・デバイセズ株式会社社長が駐日米国大使杯を、グロス91、ネット73で回られた山下宏ミネソタ州駐日代表（'60U. of Wisconsin）が内閣総理大臣杯を手にされました。昨年の大会には、マツダ株式会社から「マツダ・デミオ」をオークションのためご寄贈いただいたのをはじめ、今年同様多数の企業・団体から賞品等のご寄贈を頂きました。収益金約470万円は日米教育交流振興財団に寄付され、米国人フルブライト留学生1名分の奨学金に充当されました。

なお、来年の第29回大会は、2004年10月18日（月）戸塚カントリー倶楽部で開催する予定です。ガリオア・フルブライト同窓生に限らず、この大会の趣旨に賛同される、大勢の方々のご参加をお待ちしております。

第28回大会（2003年）



第27回大会（2002年）

建築・土木・都市・環境分野同窓会

11月12日午後6時半より、港区六本木の国際文化会館にて、建築・土木・都市・環境分野のガリオア・フルブライト同窓会が開催された。

本年は来賓として、南原晃電通顧問（GS61、東京同窓会会長代行）、Richard Plunzコロンビア大学教授、日米教育委員会より岩田瑞穂様、伊藤智章様にご臨席頂いた。

有水彊有水研究所所長（GS51）の乾杯で始まった集まりは終始なごやかな雰囲気に包まれ、会の半ばに行われたPlunz教授によるスライドを使ったミニレクチャーでは、多くの参加者がそれぞれの留学当時を懐かしく思い出していた様子、照明の落とされた室内からは紅葉を迎えたばかりの美しい日本庭園が望まれ、日米交流にふさわしいひと時であった。

時を忘れる語り合いの後、発起人でおられる原田敬美港区長（GS74）より閉会のご挨拶をいただき、また幹事として準備に奔走して下さった渡邉健介様（GS98）から、本同窓会の大先輩である芦原義信東京大学名誉教授（GS52）がご逝去されたことの報告があり、皆で心からのご冥福をお祈りした。

（打海　達也　'95　Columbia U.）

プランツ先生鎌倉にて

ジャーナリスト同窓会

ジャーナリズム分野のガリオア・フルブライト同窓会は6月29日午後、港区の国際文化会館で開かれ約30人が参加した。この分野の同窓会は以前は毎年、開催されていたが、ここ数年、滞りがちだった。ゲストとして同じ分野のUSグランティであるディーン・カルブレス、ピーター・ロウ、デイビッド・ウルマンさんの三人に加わっていただき、日米教育委員会からサムエル・シェパード事務局長、岩田瑞穂さんにご臨席いただいた。

久しぶりの開催で、初対面同士の会員がほとんどのため、歓談時間をさいて一人一人自己紹介と近況のご挨拶をしていただいた。その中でベテランの坂本宏様（日本記者クラブ）、ロバートソン・黎子様（コラムニスト）の貴重な体験談に若い現役のジャーナリストたちは感銘をうけた。

また、有田明子様（フォトジャーナリスト）、宮地ゆう様（朝日新聞）、扇沢秀明様（毎日新聞）などの方々は会のために遠方より駆けつけていただき、東京の情報だけでない貴重な地域の話を米国のジャーナリストたちと交換し有意義な場としていただいた。

業界、地域の枠を超えたフルブライト・ジャーナリストたちの意見交換、情報交換の会はとても重要だ。今後とも会員の皆様の会開催へのご協力をこの場を借りてお願いしたい。

（小泉　成史　'84　M. I. T.）

ホスピタリティ委員会の活動報告

1. 国会議事堂見学報告

島田道子　SHIMADA, Michiko
1957 U. of Minnesota American History
（Hospitality委員会　副委員長）

5月30日（金）午前9時に日米教育委員会の事務所に集合し、アメリカン・フルブライター6名、同窓会会員吉野信次氏、同窓会事務局長正野敏夫氏、スタッフの高橋和子さん総勢10名で国会議事堂へ向かいました。

津島雄二衆議院議員（55年 Syracuse）の秘書、毛利智美さんが迎えて下さり、議事堂内に入ることが出来ました。津島議員は急遽青森知事選挙の応援のため、青森へ行かれ、残念ながら今回はお会いすることが出来ませんでした。

衆議院国際部渉外課の山本祥代さんが議事堂内を案内して下さり、2階の外交団席から衆議院本会議場を見学し、議長席の上にある天皇のお座席は、いつも開会式は参議院で行われるため、一度も使われたことがないというエピソードなどを伺った。天皇が国会へお見えになる時の控えの間や、玄関中央のホールにある伊藤博文、坂垣退助、大隈重信の像を見学した後、もう一つ空いている台座に誰の像が置かれるのだろうかと話合ったりしました。議事堂内は今回も修学旅行の生徒や見学の団体で大変混雑していました。会期中でもあったため、テレビや新聞によく出て来る議員が横を通りすぎることがあり、私なりの人物評価をフルブライター達に話しましたら、結構面白がってくれました。

昼食は日米教育委員会の事務所へ戻り、皆でサンドウィッチを食べ、午後からは高澤先生のご案内で最高裁判所を見学しました。

2. 最高裁判所見学

高澤　廣茂　TAKASAWA, Hiroshige
1966 U. of Utah Social Deviance/Criminology（元副会長）

平成15年（2003）5月30日（金）同裁判所の御好意により表記見学を行った。

先ず午後1時30分濱田邦夫最高裁判所判事に対する表敬訪問に始まった。

濱田裁判官は、フルブライト留学経験者であり、流暢な英語で小半時間にわたり、米国人グランティー等の質疑に対し、応答して下さった。

引き続き小会議室において、英語版ビデオによる裁判所全般にわたる人的、物的組織、構造等の解説、英語による質疑応答が行われた。

庁内見学は、大法廷、小法廷の外、一般公開されておらない図書館、特別閲覧室等に及んだ。

午後3時半西門より退出、最初は正面玄関から庁内に入ったが、西門から退出したので一般事務室、廊下等を瞥見することができた。

因みに当日の参加者は、グランティー及びその家族7名、同窓会役員、補助者等6名、合計13名であった。

3. 日光・益子ツアー報告書（2003年5月27日～29日）

例年は11月に行う日光・益子ツアーを、参加者の都合で5月に延期され、5月27日～29日に実施しました。

最初5名とその家族4名の、計9名の参加希望者があり、そのように「いっくら国際文化交流会」にお願いしていたのですが、急に3名のキャンセルが出て、結局フルブライター2名とその家族4名（9ヶ月の赤ちゃんと4歳の男の子を含む）の参加となりました。ホームステイ担当の方が大変がっかりなさったようで、恐縮しました。

<5月27日>　上野駅に集合し、快速「ラビット号」で宇都宮へ行き、「いっくら」の方々の出迎えを受

け、昼食会のある明治屋へ。

● 午後2時より裏千家茶道教授の斎藤宗琢氏宅へ斎藤先生は宗家継承の集まりのため、東京へいらっしゃってご不在。奥様及び、2名のお弟子さんが着物を着て出迎え、お茶をいただく。その後、アメリカの夫人2名は着物を着せてもらい、大いに楽しみ、また奥様による日本舞踊を観賞した。

● コンセーレで、ホームステイのホストと会い、それぞれの自宅へ。島田はコンセーレへ宿泊。

＜5月28日＞　9時にコンセーレに集合し、チャーターバスで日光へ。「いっくら」会員及びホストファミリーも大勢参加。

● フルブライター2家族は、東照宮、華厳の滝は以前見たとのことで、奥日光を中心に湯滝、竜頭の滝、戦場ヶ原を散策し、日光自然博物館で「日光の四季」を紹介する映画を見る。

● 午後3時頃から、天皇家がお住まいになった日光田母沢御用邸記念公園を見学。大正天皇から今上天皇も一時住んでいらっしゃったとか、フルブライターには大好評。

● コンセーレで解散

＜5月29日＞　9時にコンセーレに集合し、バスで益子町へ。

● 250年の歴史を持つ栃木県無形文化財、藍染の日下田博宅を訪ね、江戸時代から伝わる染色用柄の原版などを見せていただく。

● 故浜田庄司の作品及び工房のある「益子参考館」を訪問し、特別に浜田庄司氏のお孫さんの絵付けなどを見学。

● 昼食は益子町のはずれにある流しそうめんを食べに行き、また隣接する釣堀で鱒を釣り、皆大いに楽しみ、釣り上げた鱒は焼いて、そうめんと一緒に昼食になった。

● 益子町での器の買い物の希望がなかったので、早目に宇都宮へ戻り、3時30分の快速「ラビット号」で帰京。

フルブライト賞（1997年）を受賞なさった「いっくら国際文化交流会」の長門芳子さんを始め、皆さんが心から歓迎して下さり、ホストファミリーの方々もとても親切だったので、フルブライターは大変満足し、喜んでおられました。

また、宇都宮の国際観光振興会承認善意通訳組織化団体の代表 野中忍氏('62 Univ. of Washington)と益子の松林氏が日光の案内役として参加して下さいました。

ツアー開催時期としては、秋よりも春がよいのではないかと思われます。ただ、5月はフルブライター自身が研究レポート提出などで忙しい方が多く、（日本の）大学の春休みにあたる3月～4月初旬頃で検討の余地があると思います。尚、実際の日程に関してはまだ長門会長にはお話しておらず、今後相談していきたいと思っております。

4. アメリカンニューグランティー歓迎会

2003年度のアメリカンニューグランティーの歓迎会が、グランティーと家族、文部省、外務省、アメリカ大使館、奨学金を寄附して頂いたスポンサー企業やその他ご協力頂いた企業や個人、日米教育委員会、同窓会員と家族など88人が集まって、2003年11月21日午後6時から昨年好評だった国立劇場近くのグランドアーク半蔵門で開かれました。

金子会長からフルブライト留学時代の体験をまじえた歓迎の挨拶とグランティー一人一人の紹介のあと、バイリンガルでの司会の島田ホスピタリティー委員会副委員長のゲスト紹介がありました。続いてシェパード日米教育委員会事務局長の挨拶と、フルブライターにはジャーナリスト、研究者、博士課程にある学生、新卒で修士課程にある学生などの区分があり、専門分野も多岐にわたっていると説明があり、各グランティーから日本語ある

いは英語で自己紹介と留学の目的を話して頂きました。

ついでヒュー H. ハラ米国大使館公使が日本語と英語でフルブライト・プログラムの趣旨を説明され、グランティー達に自分の体験も披露しながら励ましの言葉を贈った後、日本語で「カンパイ！」と乾杯の音頭をとられました。

終了予定の午後8時になって、私が日本式の一本締めで「中締め」をして閉会を宣しましたが、立ち去り難い人々の輪があちらこちらで出来、いつまでも話が弾んでいました。

表紙裏に歓迎会の写真を載せていますので、ご参照下さい。各地区の同窓会の皆さん、フルブライターを見かけたら声をかけて励ましてあげて下さい。

最後になりましたが、ご参加者に持ち込み用ウィスキー、ワインのご寄贈、及び受付ボランティアをお願いしました所、多くの方々からご協力を頂きました。改めて御礼申し上げます。

5. 出迎えサービス

太田　隆次　OHTA, Ryuji

1967 U. of Wisconsin Labor & Industrial Relations
(ホスピタリティ委員会委員)

成田空港での出迎えサービスについて、2003年10月現在までの活動と最近の現状を報告します。

1989年度から始めた「出迎えサービス」は川又邦雄（1968 U. of Minnesota）・桜子さん始め、ボランティアと家族の方々のご協力で、あしかけ14年間続いています。2003年10月現在で延べ136人のアメリカングランティーと家族の方々を成田空港で出迎え、最初の宿泊先まで届けました。目印に、空港では写真のようなプラカードを持って出迎えます。

1989年からの数年間は、成田空港の施設は国際空港というにはお粗末で、ターミナルもリムジンバスの乗り場も狭く、出迎えにも恥ずかしい思いをしました。今は良くなってかってのことが遠い昔のように思われます。

所が、最近は以前にはなかった違う問題が出てきました。それは倒産を含むホテル不況とバス会社のバス運行便の大幅な削減です。具体的に言う

と、リムジンバスの会社が間引き運転や、立ち寄るホテルの数を有名ホテルに限るとか、バスの運行を減らしています。場所によっては1時間に1本とか、最終便の時間を繰り上げたりしています。その対策として、近くの有名ホテルまでリムジンバスで送ってそこからタクシーで宿泊先まで、というアイディアもよく頂きますが、通常、フライターはタクシーに乗り切らないほど荷物が多く、その上、家族同伴で近距離となると、ホテルで降りてタクシーに乗り換えることは、初めて日本に到着したフルブライターにはまず無理です。

それで、窮余の策として、最終便も遅く、かつ運行本数の多い成田空港から箱崎の東京シティーエアターミナルまで乗せて、そこからタクシーでホテルに行ってもらうことが多くなりました。タクシー料金は少しかかりますが、フルブライターや家族の身の安全には代えられません。このターミナルでタクシーに乗り換える利点は、荷物がいくらでも積めるワゴンタクシーがいること、しかもタクシー料金は普通のタクシーと同じということです。もちろん、フルブライターが困らないように、タクシーの運転手に渡す、行き先を日本語で書いたメモを用意しています。

先日、面白い経験をしました。航空機の到着と税関検査が遅れ、行き先のホテルに立ち寄るリムジンバスの最終便に乗り遅れてしまいました。私はたまたま用事があったので、終点の、最寄の都内のJRの駅までリムジンバスで同行することにしました。最終目的地に近くなった頃、乗客が私達以外は全部降りてしまいましたが、運転士が、私たちに「どこのホテルに行きたかったのですか」と聞くので、「○○ホテルです」というと「このバスはそこを通って車庫に帰りますので、よかったら途中で降ろしてあげますよ」といってくれました。終点のJRの駅から○○ホテルまでどうするか思案中だった、この日、初めて日本にきたフルブライターと家族が喜んだのはいうまでもありません。

フルブライト50周年を振りかえって

50周年記念事業実行委員長　賀来 景英

皆様のご支援を得て、昨年の日米間のフルブライトプログラム50周年記念行事を無事に終えることが出来た。私が記念行事の実行委員長の仕事を依頼されたのは、50周年に当る2002年の3年前、99年の秋であったと記憶する。私はそれまで時々フルブライトの同窓会行事に出席する程度で、格別熱心に同窓会活動に取組んでいたわけではなかった（40周年記念行事には不参加）から、いささか驚いた。依頼を受けたのは当時の同窓会長であり40周年記念行事の実行委員長を務められた橋本徹氏からであったが、不運にも、仕事を通じ同氏をかねて存じあげており、また、閑な人間として目をつけられたのであろう。実際、お引受けしたあとのパーティーの折に、「私は前代の橋本さん程の大物ではないが、橋本さんに比べはっきりしたadvantageが一つある――実行委員長当時大銀行の頭取であった橋本さんよりずっと時間がある」と挨拶した。

当初は、いってみれば高校の文化祭の実行委員長ぐらいの軽い気持ちでお引受けしたのであるが、その後考えてみると相当真剣に取組むべきだと思い直した。フルブライトプログラムの歴史的意義については、冗言を要しまいが、私自身のフルブライト体験（1968～70年）をかいつまんで記すことをお許し願いたい。抑々のフルブライト留学志望動機は、とにかくアメリカへ、というより外国へ、行ってみたいという通俗的なのものであったが、結果として、人生で最も勉強に集中した時期の一つとなり学んだことは多かったのみならず、ヴェトナム戦争とウッドストックの時代といえば容易にお判り頂けるような、特異な時代のアメリカをいささかなりと内側から見る機会を得たことも私にとって大きな意義があった。そのような重く有益な機会を多くの人々に与えて来たプログラムの大きな画期にあたっては、記念行事を仲間うちの回顧の場とすることなく、なんらかの形でフルブライト精神を将来に向けて発信する場にする、前向きでオープンな企画をめざそう、肩肘張ったかたちでいえば、これが出発点となった。

さらに付言すれば、私どもフルブライト同窓生にとって、そして同窓生でなくとも旧世代の人にとっては、フルブライトプログラムは深く記憶に残り、高く評価されているとしても、当代の人にとっては、縁遠い、あるいは関心がないのが実情であろう。今や留学チャネルの幅は昔日の比ではない。このようなとき、フルブライトプログラムそのものの継続を回ることは勿論重要だし、また過去の成功物語の記録保持に努めることも大切である。しかし、フルブライトプログラムの枠組みを超えて、将来へ向けた国際的知的交流を進めることこそ、真にフルブライト精神を継承することなのであろう。これが身の程知らずの狙いであった。

その後、同窓会有志の方々、そして事務局として面倒な仕事を引受けて下さったJUSECの方々と準備を進めて来た。その皆さんのご尽力に、いま振り返って責任者として改めて感謝することは勿論であるが、同時に、私どもが助けられたのは、フルブライト関係者以外の方々がフルブライトプログラムへの理解が深く、協力を惜しまれなかったことである。フルブライトプログラムのこれまでの達成の然らしめるところであろう。そのような理解、協力の極めつけは皇室の対応であった。単一の行事に天皇・皇后両陛下、皇太子・妃両殿下がともにお出ましになることは例外に属すると聞くが、約1年前に宮内庁に行幸啓の打診をした当初から、きわめてpositiveな印象を得た。私は、別段、皇室至上主義者ではないが、やはり素直に嬉しいことである（これにひきかえ、主賓としての出席をお願いしていた総理からは遂によい返事が得られず、剰え式典当日は競馬観戦されていたと報じられた。慮外としか云いようがないのが残念である）。

多くの方々からは、記念行事を成功と評して頂いた。有難いことであるが、私の志したことがどれだけ出来たかは甚だ心許ない。最後に夢を述べれば、私どもがフルブライトプログラム50周年にあたってアメリカに感謝したように、いつの日か、いずれかの国が日本に感謝する催しを行うような日本の対外貢献が実現出来ればと思わずにいられない。

FMF-Fulbrighters' Participation Makes It Very Special and Unique

フルブライト奨学金に対する“日本国民からアメリカ国民への謝意”として1997年に開始されたフルブライトメモリアル基金（ＦＭＦ）は、早７年目を迎えました。2003年度の参加者を加えますと、すでに約4100名ものアメリカ人教育関係者が来日したことになります。ＦＭＦは年間600名のアメリカ人教育者を日本研修に招聘しており、世界最大規模の初等中等教育者交流プログラムです。開始当時のプログラム準備は 、すべての関係者にとりまして何から何までが新しい経験でした。

その当時からフルブライト同窓生の皆様には、お忙しい中スケジュールを調整してボランテイアとしてご協力・ご同道頂いたり、また東京同窓会にはご同道のみならずアメリカ人到着日の夕食ボランテイアにご協力を頂いており、感謝にたえません。

夕食ボランテイアは、右も左も分からないアメリカ人参加者にとりまして、本物の日本人に初めて会う機会でもあり、非常に印象深い経験となっています。ボランテイアの方々の中にも、初めての方が毎回数人はおられます。またリピーターの中にはご家族をお連れになったり、お友達ぐるみでご参加下さる方もいらっしゃいますが、どの方にも楽しんでいただけているようです。このような形での同窓生のプログラムご参加が、他の教員交流プログラムには無類で、何よりもFMFをフルブライターのお気持ち溢れる素晴らしいそして特別なプログラムにしていると確信しております。

フルブライトメモリアル基金プログラムは真の草の根交流で、来日するアメリカ人は全米50州とワシントンＤＣから地域・人種・担当教科等に関らず選抜されており、ニューヨークハーレムの教員から、ネブラスカの隣家は100マイル先といった田舎、あるいはエスキモーの子供がほとんどのアラスカの学校など、あらゆる社会背景を持つ教育者がはいっています。また日本側の受け入れも各地のフルブライト同窓会はじめ、各市、教育委員会、学校、地域の産業関係者、国際交流協会や一般の方々のご協力から成り立っています。多数の日本人の善意を経験したFMF参加者は、教育者としての意識も新たに、日本での研修経験を分かつべく、日本関連のプロジェクトを全米各地で繰り広げています。

この紙面をお借りして、フルブライト同窓生の皆さまのご協力に心からの敬意と謝意を表しますと同時に、引き続きフルブライトメモリアル基金の事業にご支援いただければ幸いです。

日米教育委員会フルブライトメモリアル基金
プログラムディレクター
ジョーンズ享子　7. 31. 03

FMFへの協力ボランティア活動

FMFからの協力依頼にもとづき、東京同窓会では1997年以降毎年会員のボランティア活動として、米国人教育関係者が東京に到着した日の夕食案内と、受入都市の市長表敬訪問に日米教育委員会代表代理として同行することを行って参りました。

2002年10月および2003年の夕食案内にご協力いただいた会員数と、都市同行者名（敬称略）は次の通りです。

2002年10月　夕食案内：18人
　　都市同行：荒井蝶子（鹿島市）
　　野見山一生（佐野市）
　　田島　穆（町田市）
　　安河内景山（大和市）
2003年 6月　夕食案内：17人
　　都市同行：荒井蝶子（大田原市）
　　10月　夕食案内：21人
　　都市同行：杉田芳久（日野市）
　　田島　穆（諏訪市）
　　林　養哉（春日部市）
　　安河内景山（流山市）

新刊案内

「日本の教育―将来への挑戦」

FMFではこの程、日・英文による、エドワード・ジョーンズ & ジョーンズ・享子編「日本の教育―将来への挑戦」"Japan's Educational Challenge" の書評用本（日本文254頁、英文286頁）を作成しました。編者による本書上梓のきっかけを、以下にご紹介します。

「アメリカ人教員は日本の学校の方がアメリカより優秀だという先入観をもっているので、日本から学ぶことが多いと思って来日する。ところが実際に来てみると、日本人教員がアメリカの教育から学ぶことが多いと思っているのを発見して驚かされる。」（本書より）ご関心をお持ちの同窓生は下記にお問い合わせください。

book@fulbright.jp

「Japan and International Intellectual Exchanges in the 21st Century」

昨年日米フルブライト・プログラム50周年記念事業の一環として上梓された賀来景英・平野健一郎編「21世紀の国際知的交流と日本」中央公論新社の英語版が近くジャパン・タイムス社から出版されます。ぜひこちらもご高覧くださいますようお願い申し上げます。

Kagehide Kaku, Kenichiro Hirano "Commemorating 50 Years of the Japan-U.S. Fulbright Program: Japan and International Intellectual Exchanges in the 21st Century" (Japan Times)

同窓会活動活性化についてのアンケート結果

今年７月、ガリオア・フルブライト同窓会活動を活性化するために何が必要か、会員の皆様のお考えをお聞かせ頂くためアンケートを実施しました。東京同窓会会員3,037名のうち、178名（5.9%）の方々からご回答を頂きました。お忙しい中ご協力いただきましてまことに有難うございました。ご回答の主要内容を以下にご紹介いたします。

1．今後希望される同窓会活動としては、公開講演会（32%）、年度別同窓会（28%）、専門分野別同窓会（21%）、セミナー（19%）の順でした。また、留学年度別にみると60年代以前の留学者には公開講演会の希望者が多く、70年代以降に留学した方々には専門分野別同窓会の希望者が多い傾向が見られました。

2．米国人グランティーから希望される、都内半日ツアー、鎌倉ツアー、週末のホームステイについては、都合がつけば協力したい、と回答された方々は85%にのぼりました。
　来年度の具体的計画が決まりましたら、改めてお願いします。

3．ガリオア・フルブライト同窓会および日米教育交流振興財団のホーム・ページは48%の方々がご覧になっておられました。今後とも "What's new" を出来る限り頻繁に改訂し、最新情報の提供を行ってまいります。

4．米国人留学生に対し、新たな冠奨学金を提供する可能性のある企業・団体については、20名の方々から、可能性は少ないものの、将来はあり得るとの回答を頂きました。今後相手先をご紹介いただき、関係者のご協力を得て実現に向け努力します。

5．現在の会員名簿は1998年発行ですが、将来e-mail addressを記載した改訂版を希望される方は52%と半数を超えました。しかしその一方、外部流失のリスクがあるので、改訂版の作成は必要無いとのご意見も23%ありました。e-mail address管理には、より厳重なセキュリテイ対策が必要と考えられますが、緊急のご連絡手段としては欠かせませんので、より多くの方々にe-mail address登録をお願い致します。

6．この1－2年間、米国のフルブライト同窓会を中心に、世界各国のフルブライト同窓会のネット・ワーク化が急速に進みつつあります。日本のフルブライターと接触を希望する外国人フルブライターからの依頼は、協力のご意向を示された方にその都度メールでご案内しますので、ご自身の責任において、直接コンタクトされますようお願いします。

7．このほか頂戴した沢山のコメントの中から、一部を要約してご紹介します。

●マンネリ化を避けるため、抜本的見直しが必要かと思われる。
●"鎌倉ツアー" 他、是非ボランティアで参加協力したい。
●毎年、FMFプログラムでアメリカの先生方を当幼稚園にお迎えしている。子供たち共々、草の根の交流をしている。今後も、出来る限りお手伝いしたい。
●同期のフルブライターのメディア関係者で、時々集まっている。定年まであと１年半、仕事が忙しい。
●「職業」としての第一線を引退後も、草の根的活動をしておられる方も多いと思われる。そういった方々の活動に光を当てることも有意義だと思う。
●各県別の同窓会の開催を希望する。
●年度別、専門別同窓会は大変有意義であると思う。是非計画をお願いする。
●このようなアンケートもWEB上で回答できるよ

うにしてほしい。
●今まで参加したことが無く、何となく敷居が高い。まず気楽に参加できる機会があればよいと思う。
●ローカルで出来ることがあれば、協力したい。（鎌倉、箱根案内etc.）
●年度別の同窓会があれば少し無理をしてでも出席したい。そこからネットワークが広がり、同窓会も活性化すると思う。
●サロンのようなものをアドホックに開いて欲しい。HPで行事予定表を見たい。
●ジャーナリスト部門の同窓生として、グランティーへの協力はしていきたい。
●年度別同窓会を希望する。希望者がまとまればパック旅行など企画してはどうか。
●同窓会活動に興味は無く、お役にも立てないので、退会したい。
●打てば響くリレーションシップは、30代の方が作るべきである。
●米国人グランティー支援やその他の活動をもう少し地域別に分け、グループ活動が出来るようにしてはどうか？
●グランティーの歓迎会は、彼らからも1,000円～2,000円位の参加費を取ってはどうか。会が決して豊かではないが、一生懸命であることを認識させる効果があると思う。また、パーティーでの料理の質と量を若干下げ、同窓会会費も、時節柄少し下げては如何かと考える。
●現在のままでいいと思う。
●20年来、難聴者支援の国際ボランティアを手掛けている。これは、40年余前のフルブライト奨学金支援へのお礼のつもりで、同窓会活動には協力していないが、お許し願いたい。
●年会費の自動振込制を導入して欲しい。
●ニューズレターの回数を増やしてほしい。
●個人的には内輪（小生はジャーナリスト）に限られ、広く関心を持ったり協力できる現状ではない。ジャーナリスト部会の活性化に尽力しているところ。
●専門分野別毎に、業績についての情報交換の場や、相互に出版物などを交換できる機会があれば、一層文化交流の面で貢献できるのではないか。
●ＦＭＦへの夕食ボランティアに時々参加している。一回一万円の支給は必要ないと思う。
●'56～'57の会はほぼ毎年年度別同窓会をやっている。
●ボストンと日本を往復しているが、ボストン地区でこちらに留学された方へのオリエンテーションや、日本でこれからボストンやNYに行く方へのオリエンテーションなど、ご協力できると思う
●企業のメセナだけに依存する時代は過ぎた。ゴルフをしない人達もいるので、チャリティ・ゴルフ以外にもう少し個人の寄付集めに力を入れては如何か？。

今回のアンケートで寄せられましたご意見に沿って、これからの同窓会活動を進めてまいりますので、今後ともご協力をお願い申し上げます。

（正野　敏夫）

ガリオア・フルブライト同窓会沿革

1982
●日米フルブライト・プログラムの30周年を機に全国９地区（北海道・東北・東京・中部・京都／滋賀・大阪・中国・九州・沖縄）に、ガリオア（1949～51）を含めた『ガリオア・フルブライト同窓会』を各地区ごとに結成。
●同窓生を対象に、主に米国人招聘の目的で第一回個人募金を展開し、4,400万円余りの寄付金が集まる。またその一環として『日米交流チャリティー・ゴルフ大会』も始まる。
●フルブライト上院議員を招き記念の昼食会

1983
●経済団体・企業を対象とする募金開始
●同窓会募金をもとにした奨学金による留学生受入れ始まる。

1986
●（財）日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）設立

1987
●第二回個人募金により、4,600万円余りの寄付金が集まる。

1988
●東京同窓会総会・懇親会（4/20）に、皇太子殿下（今上天皇陛下）・妃殿下（今上皇后陛下）がご臨席。
●北陸同窓会が結成される。

1990
●フルブライト上院議員来日、『フルブライト夫妻歓迎会』を開催する。
●東京同窓会主催で、新着米国人フルブライターの歓迎レセプションに、高円宮殿下妃殿下がご臨席された。

1991
●ニューヨークに『日米ガリオア・フルブライト同窓会』が結成される。

1992
●日米フルブライト・プログラムの40周年を記念し、日米教育委員会、ガリオア・フルブライト同窓会、日米教育交流振興財団の共催により、アメリカ再発見旅行、全国大会（9/18、天皇・皇后両陛下ご臨席）、フルブライト賞授与、記念品販売、フルブライト記念音楽祭（10/31、皇太子殿下ご臨席）、記念出版などの行事が行われた。
●第三回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。

1995
●フルブライト上院議員逝去

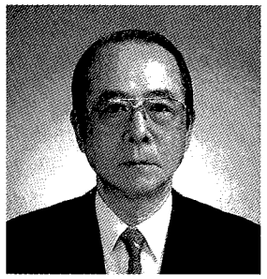
1996
●四国同窓会が結成される。
●世界のフルブライト・プログラムの50周年記念行事「アジア・シンポジウム」を日米教育委員会が開催し、シンポジウムとレセプションに皇太子殿下妃殿下がご臨席された。

1997
●第四回個人募金により、約3,000万円の寄付金が集まる。

1999
●2002年の日米フルブライト・プログラム50周年に向けて『フルブライト公開講演シリーズ』を開始。
●ガリオア・プログラム50周年（1949～99）を祝い、「ガリオア50周年記念レセプション」を開く。

2002
●日米フルブライト・プログラム50周年を記念し、日米教育委員会、ガリオア・フルブライト同窓会、日米教育交流振興財団の共催により、記念切手発売（5/8）、フルブライト音楽祭（5/9）、美術展示会（5/20～26）、フルブライト公開講演シリーズ最終回（5/25）、レセプション（5/25、天皇・皇后両陛下ご臨席）、公開記念式典／フルブライト賞授与／シンポジウム（5/26皇太子・同妃殿下ご臨席）、アメリカ再発見旅行（9/20～29、ボストン、ニューヨーク、ワシントンD.C.ほか）、記念品販売、記念出版などの行事が行われた。第五回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。

日米教育交流振興財団の状況
（フルブライト記念財団）



内古閑俊二
フルブライト記念財団理事長
Shunji, Uchikoga
President, Fulbright Foundation

1．募金活動

1986年ガリオア・フルブライト同窓会は、より多くの米国人留学生を日本に迎えるための募金活動を円滑にする目的で、日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）を設立しました。財団は以後個人・企業・団体からの寄付を受け入れ、毎年数千万円をフルブライト・プログラムに提供して参りました。近年の募金状況は次の通りです。

（単位：千円）

冠　　名	2001年度	2002年度	2003年度（見込）
A50	94,415	13,010	12,500
国際経済交流財団	6,905	3,957	4,000
トヨタ自動車	5,000	5,000	5,000
三菱グループ	5,000	5,000	5,000
YKK	10,000	10,000	10,000
チャリテイ・ゴルフ	5,482	4,675	4,000
個人募金	36,577*	3,952*	1,000
上村和子様	0	5,000	0
緒方貞子様	0	1,200	0
三上泰永様	0	0	135,801**
合　　計	163,379	51,794	177,301

＊　50周年記念代5回個人募金：2001年度36,577千円、2002年度3,851千円、合計40,428千円
＊＊2003年度収支予算には未計上

2．外部監査の導入

公益法人をとりまく社会、経済環境の変化に対応し、財団の透明性およびディスクロジャーをこれまで以上に充実させるため、2003年度より中央青山監査法人に外部監査を委託しました。

財団の寄付行為、役員名簿、2002年度財務諸表、2003年度事業計画・収支予算等のディスクロジャー資料は、下記の同窓会・財団ホームページでご覧になれます。

http://www.fulbright.or.jp

3．50周年記念第5回個人募金追加入金分芳名録

（単位：円）

俣野一郎様 30,000、　毛利昌史様 20,000、
伊牟田義介様 10,000、　内藤順敬様 10,000、
平井正穂様 10,000、　三浦秀之様 10,000

4．地区別役員等名簿

2002年6月28日開催の財団理事会・評議員会で選任された2002／2004年度役員等の名簿は次表の通りです。

2002/2004年日米教育交流振興財団・地区別役員等　（敬称略）

地　区	顧　問	理　事（24）	監　事（3）	評議員（22）	審査委員（10）
北海道		有江　幹男	高向　　巌	熊本　信夫 岡田　宏明 関口　恭毅	曾野　和明
東　北		青木　茂之 仁科　雄一郎		高橋　綱夫 吉川　清隆 鳥羽　良明	菊池　和聖
東　京	大河原　良雄* 平野　龍一	理事長 内古閑　俊二 副理事長 賀来　景英 小西　輝明 渡邉　　宏 金子　尚志 佐藤　満秋 桐渕　利博	高澤　廣茂	太田　隆次 深尾　凱子	山本　澄子
中　部		木下　宗七		千田　純一 上田　慶一	岩野　一郎
京　滋	岡本　道雄*	榊原　胖夫 西島　安則		市村　真一	千葉　哲郎
大　阪	川淵　秀夫 刺賀　信雄 金辻　信弘	牧野　信夫 小原　　望 後藤田　輝雄		重里　俊行	山藤　　泰
中　国		木村　榮一 隅出　昂伸		坪井　清彦** 三好　啓治	祐宗　省三
九　州		原口　三郎 今里　　滋	小木野　　一	林　　弘子 落合　太郎 西田　昭彦	永田　元義
沖　縄		比嘉　幹郎 東江　康治		川満　　敏 宮城　宏光 下地　　守	瀬名波　榮喜
北　陸		星野　　命		森田　幸夫	橋爪　祐美
四　国		三木　吉治		太田　英章	

＊　最高顧問　　＊＊　2003年9月23日逝去

2003年度財団奨学生冠名リスト

採用者数：Fulbright Fellows（RecentB.A.）　—FF　5名
Graduate Research Fellows（Graduate Students）—GRF　6名
Graduate Students—Japanese　—GSJ　2名

冠名（敬称略）	奨学生名	カテゴリー	受入大学名	出身大学（最終）名
＜Americans＞				
1. トヨタ自動車	CHOW, Marianne W.	FF	横浜市立大学（国際関係論）	Tufts U.（International Relations）
2. 全国同窓会	EASON, Paul V.	FF	九州大学（日本史）	U. of California, Berkeley（Japanese History）
3. 全国同窓会	LAU, Megan C.	FF	大阪大学（演劇学）	Amherst College（Drama & Theater）
4. 志野基金	MARGOLIN, Jayme B.	FF	北海道大学（地学）	Franklin & Marshall College（Geoscience, General）
5. 緒方貞子	VEKASI, Kristin E.	FF	東北大学（政治学）	New College of Florida（Political Science, General）
6. 三上基金	HENRY, Todd A.	GRF	京都大学（アジア史）	U.C.L.A.（Asian History）
7. 三菱グループ	LONG, Hoyt J.	GRF	大妻女子大学（日本文学）	U. of Michigan（Japanese Literature）
8. 全国同窓会	MOORE, Aaron S.	GRF	東京外国語大学（日本史）	Cornell U.（Japanese History）
9. YKK	O'DWYER, Emer S.	GRF	慶応義塾大学（日本史）	Harvard U.（Japanese History）
10. 国際経済交流財団	SMITH, Colin S.	GRF	東京大学（文化人類学）	Yale U.（Cultural Anthropology）
11. 国際経済交流財団	WILSON, Roderick I.	GRF	法政大学（日本史）	Stanford U.（Japanese History）
＜Japanese＞				
1. YKK	額賀　美紗子	GSJ	U.C.L.A.（教育社会学）	東京大学（Educational Sociology）
2. 上村和子	小林　久美子	GSJ	U.of Michigan（アメリカ文学）	東京大学（American Literature）

2003年度A50奨学生リスト

採用者数：Fulbright Fellows（Recent B.A.）　—FF　5名
Journalist　—J　1名
Graduate Research Fellow　—GRF　2名
Researcher　—R　2名

冠名	奨学生名	カテゴリー	受入大学名	出身大学（最終）名
＜Americans＞				
1. A50	CAMPBELL, Douglas L.	FF	神戸大学（政治学）	Boston College（Government & Political Science）
2. A50	DIEHL, Chad R.	FF	長崎大学（日本史）	Montana State U.（Japanese History）
3. A50	NAKAYAMA, Joy A.	FF	甲南大学（政治学）	Claremont McKenna College（Government & Political Science）
4. A50	SILBERSTEIN-LOEB, Jonathan M.	FF	同志社大学（ジャーナリズム）	Colby College（Journalism）
5. A50	YANG, Timothy M.	FF	名古屋大学（国際関係論）	Dartmouth College（International Relations）
6. A50	TRAN, Khanh TL.	J	東京大学（アジア史）	Berkeley, CA（Asian History）
7. A50	AMES, Christopher A.	GRF	京都大学（文化人類学）	U. of Michigan（Cultural Anthropology）
8. A50	GINSBERG, Tatiana S.	GRF	京都精華大学（地域学）	U. of Iowa（Area Studies）
9. A50	JOHNSON, David T.	R	早稲田大学（刑事法）	U. of Hawaiiat Manoa（Criminal Law & Procedure）
10. A50	LIPPIT, Seiji M.	R	早稲田大学（日本文学）	U.C.L.A（Japanese Literature）

A50/フルブライト奨学金は、2001年がサンフランシスコ平和条約締結50周年記念にあたることから、戦後日本の再建にあたって、米国から受けた様々な支援と協力に対し謝意を表すため行われた、A50事業の一環として創設されました。
「A50」の「A」はAppreciationとAmericaの頭文字であり、「50」は50周年と全米50州、さらに次なる50年を意味します。

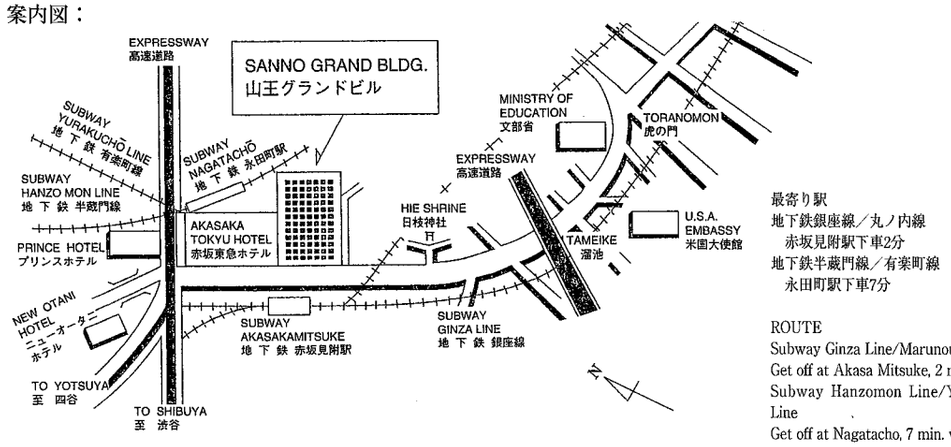
事務局からのお知らせ

1．2002／2003年度中に次の方々から同窓会にご寄附とご著書のご寄贈をいただきました。厚く御礼申し上げますとともに、ご著書は事務局にて会員の皆様の閲覧に供します。

徳座　晃子様　20,000円
故中村　龍一様　30,000円
山本　澄子様「英米演劇移入考　明治・大正・昭和」　文化書房博文社
太田　隆次様「コンピテンシー実務ハンドブック」　日本法令
小貫山信夫様「チャールズ・E・ガルスト
ミカドの国のアメリカ陸軍士官学校卒業生」　聖学院大学出版会

2．9月16日（火）から、日米教育委員会事務局と同じ山王グランドビルの地下1階B135区に移転し、業務を行っております（平日　10：00〜16：00）。どうぞお気軽にお立ち寄り下さい。
新　住　所：〒100-0014　東京都千代田区永田町2-14-2　山王グランドビルB135
新電話番号：03-3503-1841
新FAX番号：03-3503-0758

案内図：



なお、メールアドレス、URLは従来通りです。
E-mail: fulb@fulbright.or.jp
http://www.fulbright.or.jp

3．今年のニューズレターは、新任の定森大治パブリシティ委員長と江端貴子同副委員長のもと、JUSEC伊藤さん、ホームズさんにも参加願い、7月から6回の打ち合わせを行い作成しました。チャリティ・ゴルフやニュー・グランティー歓迎会等秋の行事もカバーするため、発行時期はこれまでより2ヶ月遅らせて12月とし、EU諸国のニューズレター同様表紙はカラー印刷で、1社にしぼった広告を掲載しました。ぜひ感想をEメールまたはファクスにてお寄せください。

ガリオア・フルブライト東京同窓会
〒100-0014　東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビルB135
TEL: 03-3503-1841　FAX: 03-3503-0758
E-mail: fulb@fulbright.or.jp
http://www.fulbright.or.jp